

熱意が創り上げた 10 日間

スキーオリエンテーリング世界選手権 2009 の舞台裏

村越 真

大会総務部門の村越が語る
スキーオリエンテーリング
世界選手権ルスト大会。



世界選手権開幕直前。ナンバービブの打ち合わせを行う村越（右）とシニアイベントアドバイザーのコレテニエミ（左）

「Dream comes true」

史上初めてヨーロッパ外で世界選手権が開かれた 1985 年、開催国のオーストラリアの連盟役員が開会式の挨拶で冒頭の台詞を口にした。北欧のスポーツであったオリエンテーリングを、国際的スポーツにする第一歩、その夢への踏みだしが 1985 年の世界選手権だった。

それから四半世紀が過ぎた。今度はスキー O で、「夢が現実のものとなった」。スキー O 史上初めて、ヨーロッパ外での世界選手権が開催されたのだ。

オリエンテーリングが日本で本格的に定着して以来、日本の運営力は国際的にも高い評価を得てきた。明治初期に西欧化を成し遂げた勤勉な国民性と江戸時代の知的蓄積の伝統は、洗練された運営を必要とするオリエンテーリングにも生かされたのだ。あまり意識されていない事実であるが、つい最近まで日本は非ヨーロッパ的な文化を根底に持つ国で、唯一オリエンテーリングが定着している国だった。そして、2000 年以降の数々の国際大会を経て、運営力から、技術的なスキルに至るまで、全てが世界標準にあることが実証された。

招致への道

IOF は、ここ数回の冬季五輪でのスキーオリエンテーリングの種目採用のためのロビー活動を精力的に続けている。エコフレンドリーであり、新たな施設を要求しない。時代の流れに合ったスキー O にとって、唯一の問題はヨーロッパ外への広がりであった。

現在、ヨーロッパ外で継続してチームを送っているのは日本だけ。世界選手権はヨーロッパから出たことがない。国際的スポーツへの脱皮、それは五輪入りを狙う IOF にとって欠かせないステップであり、そのためにもヨーロッパ外での世界選手権開催は不可欠の条件であった。何度となくあった公式、非公式の打診の結果、2004 年 12 月の JOA 理事会において、今回の大会の招致が決まった。

機関決定はなされたものの、大会の正式決定への道のりは平坦ではなかった。最大の問題を惹起したのは、2005 年のフット世界選手権であった。この大会は、技術的にも運営的にも高い評価を得たが、4000 万円もの赤字を計上した。にわかに予算に関する懐疑的な見方が強くなった。運営者に関する懸念もあった。たかだか 20 人程度のコアな活動者がいるだけのスキー O。選手を派遣すれば、その多くがチーム側に回る。運営に習熟した運営者の数はおそらく、片手で足りる程度…。JOA の理事会では、何度も予算や計画についての検討が迫られた。

二つの光明

光明はヨーロッパでも最も親日感情が高い国とされるフィンランドからやってきた。2005 年のフィンランドのリゾート地レビで開催された地図を、IOF 理事会で見せてもらった時、「これならできる！」と直感した。地図のレベル、何度も使い回しできるテレイン。フットの世界選手権の地図の準備について思いをしている身から見れば、地図の準備など、一人でもできそうな作業だった。

一つの光明はフィンランドオリエンテーリング連盟からさしのべられた。IOF の会議の時、羽鳥氏が「フィンランドが手助けしたい」と言っているというのだ。こうした申し出は、リップサ

ービスのことも多いので、その時はあまり興味を引かなかった。しかし、2007 年、ウクライナでの世界選手権のパーティーの時、IOF 理事会で同僚だったヘイキネン氏がやってきて、「フィンランド連盟は日本のスキー O 世界選手権に援助をするつもりなので、遠慮なくいってほしい」という申し出を受け、事務局のミッコとアドレスを交換した。元イベントアドバイザーであったイタリア人はフィンランドのコレテニエミ氏に変更になった。今思うと、この時点で、フィンランドの全面的協力の道筋が付けられていたのだ。

もう一つの光明は国内の努力によって得られた。愛知の時には検討だけにされなかったスポーツ振興基金に応募したところ、ほぼ満額の 250 万ほどの助成が認められた。これで少なくとも赤字はあり得ない。開催決定以来悩まされてきた大きな問題の一つが解決された。

手抜き加減

スキー O が、フットと比較したら随分な「手抜き」を許容するものであることは分かっていたが、大会運営をしたことのない僕にとっては未知の作業量に対する不安は抜けなかった。故内山氏が闘病のため、一線を抜けてしまったのも大きかった。大会を 1 年後に控えた 2008 年春にも、技術的に形あるものはほとんどなかった。それが致命的な状態なのかどうかさえ判断が付かなかった。

そんな時、コレテニエミ氏が、フィンランド連盟が費用を負担したミレニエン氏を伴ってやってきた。大会に対する彼の評価は、思いの外高かった。ルストリゾートのファシリティーに対する賛辞と、地図に対するちょっとした改善要求を残して彼は帰っていった。

そして再来日した 10 月、彼は、アシスタントアドバイザーに加えて、さらにもう一人のフィンランド人の助っ人を帯同する計画を私たちに知らせた。

彼がそれだけの人材を投入しようと思ったということは、裏を返せば、それで出来ると見切ったのだ。

泥縄

国内のスキーオリエンテーリングの大会の多くで、前日の午後にモビルでトラックをつけ、その軌跡を GPS で記

録して地図上のトラックとし、そこからコースを組んで、地図を印刷するという、フットから見たらあり得ない運営方法をとっている。

週末1レースならいざ知らず、4日間に渡るレースでは、この方法では破綻するだろう。技術情報であるブリテンが、大会開始時に間に合わないのも、どんなに寛容で忍耐深いイベントアドバイザーでも胃を痛めるだろう。しかし、スキーOではそれが現実だった。

スタート方式や地図配布方法は前日に変更され、それが監督会議でのチーム監督からの疑問でさらに変更されたりする。ロングのスタート時の地図配布方法は当日のスタート30分前に変更になった。

僕自身、この時にはもうスキーオリエンテーリングの運営を見切っていたので、何でも来いの気分だった。ミドルでは元々1分だったスタート間隔が、監督会議のあとの議論の結果、2分になった。さっさと的場に連絡をして、会議の直後にはもう2分間隔に修正したスタートリストを届けさせた。

オリエンテーリングは、競技スポーツとして確立し、洗練され尽くしてしまった。その分、規則もそれを遵守する姿勢も、ありえないくらい高くなっている。しかし、状況が刻々と変わり、ファシリティーも充分でないアウトドアでは、それは一種異常な状態でもある。

最近アドベンチャースポーツに出ていると、そのことを常に感じる。アドベンチャースポーツの母体であるパラダカラリーでも（奇しくもそれらはいずれもラテン系文化を強く受け継ぐフランス発祥のスポーツである）、天候が悪ければスタート変更、コンボイ（参加車両が隊列を作って移動する）での移動へと、主催者の判断で変更される。臨機応変さが求められるのが、アウトドアスポーツの常なのだ。そんな意味で、スキーOの運営は、アウトドアスポーツの運営の本質を見直すチャンスになった。

グランドスラム達成？

この10年、僕はワールドゲームズ(2001)と世界選手権(2005)のいずれも技術統括をやり、2008年には韓国のアジア選手権を技術的にサポートし、世界最高峰の大会は悉く手がけ、成功させた。そして今回はスキーオリエンテーリングで世界最高峰の大会を手がけることになった。競技の世界でいえば、これはもうグランドスラムにも等しい。

火事場の火の粉のように払っても払っても振りかかる仕事を、一生で一度の冥土の土産だと思いながらこなして、ようやくルストに向かう日が来た。トーナメントの予選を勝ち上がって、いよいよセンターコートでの決勝戦だ。センターコートに立てば、大観衆が疲れた心と体を奮い立たせてくれるだろう。しかし、今回はスキーO。これまでとは違う総務の総括。オールウェザーを得意とする僕が、苦手の芝コートで、しかも嫌いなネットプレーヤーを相手に試合をするようなものだ。

試合の詳細は、本号の村越日誌や、ブログを参照してほしい。チーム到着前日は終えなければならない仕事の作業中に、選手からの要望が入り、やってもやってもゴールは遠ざかっていくようだった。地図・コースを一手に引き受けていた高島・木村は、夜通しの作業を幾晩も続けた。

グランドスラム達成という気にもなれなかったが、かといって負けたと思うには周囲の評価は高すぎた。突然の豪雨による無期延期で決着つかず。そんな気分だった。

それでもバンケットの時、ルストリゾートの支配人の谷口さんがわざわざ私たちのテーブルに来て、「ご苦労様でした」と握手を求めた時、辛かった日々を乗り越えた達成感で胸がいっぱいになった。献身的に働いた役員、そしてプロとして求められる以上のホスピタリティーを発揮したルストリゾートの協力がなければ、センターコートに立ち、恥ずかしくない試合をすることはできなかっただろう。

睡眠不足と疲労でぐちゃぐちゃだったけれど、「これなら10年に1回くらいやってもいいかな」と、帰路に思っていた。



世界選手権に絶大な協力をいただいた加森観光(株)のみなさん。
加森社長(左)、オリエンティアでもある熊谷氏(左から2番目)、今回のキーパーソン信原氏(左から3番目)、ルストリゾートを預かる谷口常務(右)

Post Script

限られた競技人口、資金的な問題。そうまでして世界選手権を開催する必要があったのか、という議論は準備中も絶えなかった。幸いなことに、大きな破綻も財政面での赤字もなく大会を終了できた。

How do you feel? 大きな国際大会を終えると、国際オリエンテーリング連盟のお偉方から、たいていこう聞かれる。「ほっとした」「達成感」そんな答えを期待しているのだろう。

2000年に、日本で初のワールドカップを終えた翌朝も、こう聞かれた。僕の頭をよぎったのは「I feel like a General who enjoy great victory but lost a lot of soldiers」という回答だった。大会は大成功だった。選手からの評価も高かった。しかし、その陰には仕事の重荷に耐えられなかった役員や、苦勞ばかりで充実感を得ずに終えたコア役員が少なくなかったからだ。

2005年の世界選手権も、競技面では大成功だった。大赤字が残った。「I feel like a Ministry of Military who lead the country to victory but make the country bankrupt.」そんな心境だった。

そして、今回の世界選手権、バンケットで、多くのコア役員が、IOF副会長のヒュー・カメロンから、気分はどうだと聞かれたという話を聞いて、いったい僕はどんな気持ちだったのだろうかと考えた。

「第二次世界大戦後期のノルウェー人の気分」。バンケットの時、選手代表として大会に賛辞を送ってくれたノルウェー選手を見ながら、そんな比喻が浮かんだ。ナチスの占領を許しながら草の根のレジスタンス運動と周辺諸国との協調で最後まで抗戦を続けた。それは勝ち負けとは別次元の価値だろう。

何の得にもならない国際大会の運営にこれだけ熱意を燃やす人がいる。そしてそれを支える高い技術集団がいる。それを肌身で感じられること、それに比べれば、「五輪へのマイルストーン」「国際的スポーツへの一歩」などはちっぽけなことと思えた。

(村越 真)